パネルディスカッション

討論――パネリストと基調講演者によるセッション――

パネリスト

福澤 武
三菱地所株式会社
取締役会長

大山昌伸
総合科学技術会議議員
株式会社東芝顧問

大田弘子
内閣府政策統括官付
参事官

ナビゲーター

宮崎 緑
千葉商科大学助教授
ジャーナリスト

パネリストに聞く明るい構造改革

宮崎　では、新たに加わっていただいたパネリストの方々から、プレゼンテーションをいただきましょう。

福澤　丸ビルは昨年９月のオープン以来、４カ月で1,000万人もの方々においでいただきました。これは予測の倍のペースになります。

この要因の一つとして、こだわりのある物販や飲食店の人気が挙げられます。しかし実は、当初、社内には丸ビルに商業店舗を入れることに反対する声もありました。昔の丸の内では休日の売り上げが伸びないため、店舗向け営業担当者は非常に苦労していました。そこで、新しい丸ビルは全部事務所に特化したビルにしてもらいたいという意見が出てきたわけです。一理ある意見だとも思いましたが、しかし、乗降客の多い東京駅の目の前という立地なのだから、工夫すれば集客は可能なはずだということで、結論としては丸ビルに商業店舗を入れることにしました。どういう店舗にするかということについても議論を重ね、一口で言ってこだわりのあるお店にこちらからお願いしました。これが、成功した要因の一つだろうと思います。

このように、あることをやろうとしたとき、必ずネガティブな反応を示す人がいます。ネガティブな面から見るということは、一面ではリスクマネジメントの点からいっても必要なことですが、しかし無難な道のためにネガティブな意見に支配されては、発展もありません。

今、小泉総理が、構造改革特区を提言されています。やはりネガティブな反応は出ていますが、我々としては、日本の閉塞状態に風穴を開ける絶好のチャンスを活かさなければいけないと思います。

大山　私からは、情報通信技術の進歩によってもたらされる夢とロマンの世界をご紹介申しあげます。

科学技術の進歩は、その多くが私達の生活を豊かにしてくれます。20世紀後半に開花したIT技術は、行政・医療・交通などのサービス分野もネットで一元化して、水や電気に匹敵するような私達のライフラインの一部になるでしょう。この分野における最近の急速な技術革新を見ていますと、これまでの利便性やスピード追求といった世界を超えて、生活文化における新しい価値創造が起こり、次のような夢の世界が実現すると考えています。

1．生活が楽しくなる世界―ネットワーク家電が、「手伝ってくれる」「楽しませてくれる」「助けてくれる」「知らせてくれる」といったキーワードを軸に、消費者のウォンツに応えて大きく進化していくでしょう。
2．創造性に富み、より潤いのある生活空間の実現―ブロードバンドの利用環境ではコストのブレークスルーが急速に進むと考えられ、家庭やモバイル環境での用途拡大が見込まれます。
3．「いつでも、どこでも」という社会の実現―情報利用に関する地域間格差、個人の活動格差、知識の格差といったものが大幅に解消されると考えます。
4．安全・安心の世界―ホームサーバーを中心に、ネットワークで家庭内における安全の見張り番、安全確保の代行役などが飛躍的に向上すると読んでいます。
5．車社会を支える安全で快適なインフラ―ITSに代表される情報ネットワークが進展し、渋滞の解消、料金支払いの自動化、自己情報の提供などの今日的な問題解決にとどまらず、物流・移動・防災といった総合的な視点での道路インフラの有効活用が、さらに進むと考えます。
6．医療サービスにおける安全・安心の世界―個人の特性に合った適切な医療サービスが受けられるようになり、生涯を通した一貫性のあるサービスが実現。これまでの治療から予防医療への改革が進むでしょう。
7．家庭内のロボット―現在のロボット応用は産業分野が主ですが、これからは健康管理、移動支援、留守番役といった生活支援密着型

ロボットなど、家庭内で活躍するロボットの方向に大きく舵がきられていくと考えます。以上が事例紹介です。

私の信念は、科学技術に境界はないということです。こういった生活文化における新しい価値創造のためには、さまざまな課題の克服が必要です。総合科学技術会議が、まさに課題克服の司令塔であるということを認識し、皆さまが求める社会を築くため、科学技術創造立国の実現するというゴールを目指して、今後も努力していきたいと思います。

大田　私は、明るい構造改革というのは、消費者が原動力になるような改革だと思っています。今、消費者が欲しいと思っているものは、⑴介護や子育てなど、生活の中で人手を借りたい分野⑵健康や学習といった自分をよくしたいという分野⑶人とのコミュニケーション⑷住宅や都市環境といった生活空間　という、技術をうまく使えば飛躍的に選択肢が拡大する分野です。こういう分野で消費者がお金を使えば、生活がよくなるだけではなくて、雇用が生まれ、新しい技術の応用も進み、日本経済が活性化します。

では、なぜ進まないのかといいますと、邪魔しているものがあるのです。その一番大きいものが規制です。規制緩和はかなり進んできましたが、医療や福祉、教育といったサービス分野で残っています。

これらの分野の規制の一番目の特徴として、ビジネスをやろうという人がいても、参入段階で自由にできないということがあります。介護施設は社会福祉法人、教育は学校法人、病院は医療法人でないとだめ、つまり非営利でないといけない。非営利というのは善だから悪いことはしない、でも株式会社は儲け主義だから何をするかわからない、健康や命は預けられない。そういう大義名分で参入が規制されてきました。

二番目の特徴として、利用する人と事業者が対等ではありません。福祉や保育の分野では、長い間、サービスが必要かどうかは役所が判断し、十分でなければ提供するという行政措置としてサービスが供給されてきました。対等ではありませんから、利用者がニーズに応じて選ぶことができなかったのです。

それから三番目の特徴としては、料金が一部保険や税として払われますから、私達がコスト感覚を十分に発揮できない。お金の使い勝手に見合っているかどうかを、十分に判断できないという問題があります。

もちろん、このような健康や安全にかかわる分野はとても大事ですから、すべての規制がなくなればいいなどということは、まったくありません。規制は必要です。でも、消費者が助けられている規制は、いい規制ですが、それでサービスを売る側、供給する側、経営する側が助けられているとしたら、そういう規制はやはりもう廃止しなければいけないと思います。

もっと、消費者の選択を機能させるようにしましょう。それから経営主体に競争してもらいましょう。そのかわり事後的にサービスの質や情報をチェックして、だめなところは潰れてもらいましょうという点がポイントだろうと思います。

日本の消費者は非常に素晴らしくて、いろいろなところを面白がるんですね。宅配便やコンビニを発達させ、携帯電話も写真まで撮れるという思いもかけない方向に発展させています。日本は、消費者が主役になれば、経済活性化の余地は非常に大きいと私は思います。

まとめますと、明るい構造改革というのは、とことん利用する側に立った社会をつくることだと思います。これまでは、規制に守られてきた当事者が強い政治力をもって改革に反対し、それにNOを言う消費者の力が弱かった。これが改革を遅らせた理由の一つです。

しかし、最近、私達が闘っていく、一つの有力な武器ができました。それが構造改革特区です。全部規制改革しようとすると、いろいろ抵抗がありますから、一部特区をつくってそこでやってみたらいいじゃないかということなのです。１月に締め切られた第２次募集では、650件もの提案がありました。私は、今日の基調講演を聞きながら、３人の先生方に一つの特区をつくって思う存分やってもらえたらいいな、明るい構造改革特区というものができるといいなと思いました。

とはいえ、構造改革特区は、ほんの一つの武器にすぎず、まだまだ消費者の力は弱いものです。消費者が消費者として自分のお金の使い勝手にとことんこだわることが、私は構造改革につながっていくと思います。そして、使い勝手のある社会をつくっていかなければいけないんだと思います。

消費者主権の時代が来ている

宮崎　ありがとうございました。今、３人のパネリストの方からお話をうかがいました。明るい構造改革特区をつくるという提案もございました。島田先生、それをお聞きになっていかがでしょう。

島田　明るい構造改革特区、いいですね。今日はその結成式にしたいという感じです。

パネリストの方々のお話に共通していたのは、私達が大きな時代の転換点にいて、次の時代に向かってとにかく渡ろうとしていること、そこを渡ると明るい構造改革の可能性が見えているということでした。それをどう実現させたらいいか。これも共通していたことだと思いますが、生活者、消費者が選べる社会ということです。私も基調講演で申し上げましたが、生活者が持っているウォンツを実現するということだと思います。それが産業になる。健康、長生き、美しくなりたいということもあるでしょう。それから楽しくコミュニケーションをしたい。そして住むところや都市が安全で、安心で、便利で、快適であってもらいたい。それは環境が保全されているということでもあります。ここでこれほど共通しているということは、それだ

け私達のものの考え方が共通しているということですから、それに向けて新しい商品やサービスが提供されてくれば、これは非常に大きく伸びるはずです。

大きく分けて、それを規定している要因は制度と技術、そして一番大切だと訴えたいことが、考え方です。制度は設計すれば越えることができます。技術も開発すれば次の時代を拓くことができます。しかし、それを突き動かす一番大きな力は、私達の考え方なんです。国民が、生活者、消費者主権の時代が来たと思うことが重要なんですね。次の時代のリーディング産業は、大規模な企業ではなく、私達のウォンツにきめ細かく応えてくれる身近な企業です。全国各地の中小企業、オーナー企業、NPO の方々が思い思いの工夫で頑張る。それが先進成熟社会であるということを、私達が確信することです。

宮崎　みんなが島田先生のように元気だといいのですが、問題はそこまで保つかどうかと、今現在困っている方達もいらっしゃるわけですよね。基調講演で小宮山先生からご紹介のあった素晴らしい技術、感動的に拝見しましたが、その実現までいけるかなという部分がある。どうも近い将来という感じがないんです。これは、どこに問題があるのでしょうか。

小宮山　基調講演でお見せした例は、我々が仲間と議論して本当に実現できるであろうという結論に達したものしか挙げていません。島田先生がおっしゃるように、基本的にはそれを私達が本当につくろうと決心するかどうかではないでしょうか。

日本の議論は非常に進んでいて、言われるべきことはほとんど議論しつくされています。実は結論が出ているのに、決心がついていない。結論に自分が納得して、社会が共感して、実行していく。ここのところに、時間がかかりすぎているんだと思います。

これは、途上国から先進国に移っていく転換期にあるということなのでしょう。先進国というのは心の持ちようからいうと、恐らく自分達のことは自分達で決めるということだと思います。ここのところが、まだ我々の心の中でできあがっていない。しかし、もう少しだと思います。

宮崎　まだ、甘えの構造というか、周囲を見て自分を決める主体性のなさのようなものがあると。では、頑張った人が報われる社会になっているかどうか。これが、大変大きな疑問だと思いますが。

大田　少しずつ、そうなってはいますが、まだそこまでいっていないところもあると思います。今、政府に依存している産業や、規制に守られたところが縮小せざるを得ない状況です。その受け皿が今日議論しているところで、報われるものをつくることも同時並行で進めなければいけません。

土地有効活用の方策とは

伊藤　こういう話になると、私の領域はちょっと調子悪いんですよ。皆さま、日本で土地がどれぐらいに分かれているか、ご存知ですか？

１億２千万人の皆さまがお持ちの土地が全国で3,600万に分かれているんですよ。ですから４人に１人が土地をお持ちということになる。それぐらい土地が分かれているんです。こんな国は先進諸国にないですよ。10坪とか15坪の土地を持って土地にしがみついているのが、実は日本人なんです。これをやめないと、いろいろな建物づくりをするときにも、島田先生や小宮山先生にいいものをおつくりになっていただいても、それを使う場所である住宅がうまくいかない。これはとっても深刻なんです。

宮崎　ということは、その先を類推しますと、基調講演で平成の小泉検地とおっしゃっていましたが、公地公民とかそういう方向に行ったほうがいいということですか。

伊藤　私はそこまで論理的ではないんですけどね。例えば、皆さまの土地でも隣の土地と隣地境界をしているところがあると思います。でも、境界争いすると境界決まらず、土地を売ろうとしても売れない。そういうことが目の前に起きているのに、自分の問題ではないと思っているのが私達なんですよね。

宮崎　まさに基盤の問題ですから、土地の制度が変わらないとその他のことも、なかなかよくならないのではないですか？

福澤　そうですね。今、伊藤先生がおっしゃった境界が決まっていないという問題は、日本のほとんどの土地に当てはまるかもしれません。ですからその点を、公図・地積図の整備という基本からスタートしていかなければいけないと思います。

それに、地価が下落し続ける限り、結局日本経済における不良債権も減らないということですから、これはやはり構造改革の一方で地価下落を止めるという思い切った政策をとる必要があるのではないでしょうか。土地の有効活用のためにどういうことができるか、その実験ができるのが特区です。その特区で思う存分やって、そこで成功したものを今度は全国規模で広げていくという方向へもっていかなければいけないと私は思います。

宮崎　要するにシミュレーションするということですね。

島田　中長期的な解決策として、住宅を流通させてレンタルをする時代に変化させることも考えなくてはいけません。

日本の答えが世界基準に

伊藤　都市をどうしたらいいかという視点からいえば、僕は美しさというものを日本人が失ってしまったのではないかと思うのです。だから街路樹を切ってしまったり、電柱を地中化しないでいたりして平気なのか

と。美しい日本の具体的姿を、市民は市民、企業は企業、それぞれ身近なところで考えていただくことが必要なのではないでしょうか。

例えば、ゴミ捨て場にあるカラス対策ネットはあまり美しくない。あれに無神経でいる限り、日本の街はよくならない。ドイツのように、区役所が10坪ぐらいの土地をゴミ捨て場として買って、そこをNPOがきれいに掃除して、大きい箱を置いてあるような場所が100メートルピッチにあるなんていうのが日本をよくする街づくりだと思います。

宮崎　そうすれば、土地の価格も相対的に上がるかもしれないですよね。

小宮山　街を美しくしよう、そのために電柱を地下に埋めよう、ゴミの収集システムを何とかしていきたい—これらは我々にとって切実な問題です。日本は人口密度の高い先進国ですから、環境問題というのは一番最初に顕在化します。しかし大事なことは、我々がいいシステムをつくれば、それが国際的なデファクト・スタンダードになりうるということです。

日本と同じように、高温多湿のモンスーン気候に巨大な人口密集都市を持ったアジアの国はたくさんある。つまり、こういった問題は我々にとって困難なものではあるけれども、自分達のためにもきちんとした答えを出せば、それがアジアをはじめ世界のデファクト・スタンダードになっていく。世界に先駆けて解決するという姿勢が重要なのです。

宮崎　そうすると、例えばゴミを家庭から家の外にある収集場所に持っていかなくてすむような処理の技術やシステムをつくったりすると、その技術やシステムそのものが外貨獲得の手段になったり、日本の存在感を高くするような手段になったりと、技術が解決できる部分がたくさんあると思うのですが、いかがでしょう。

大山　おっしゃる通りだと思います。これからいろいろな経済圏、あるいはグローバル化という視点の中で、日本の技術がそういう形で人類のために役立っていくと。非常に大きな国際貢献にも繋がるという視点で、新たなビジネスチャンスが拡大していくと想定してよろしいのではないかと思います。

起業しやすい仕組みづくりを

宮崎　では、新しい未来に向けて、誰かに頼るのではなく、自立して自分で変えていこうという人が技術で何かできないかと思ったら、まずどう立ち上がったらいいのでしょうか。

大田　今までのお話を角度を変えて聞くと、新しい中小企業の時代が来ているということだと思うんですね。高齢化、環境制約、情報化などはいずれもまさに中小企業が活躍する分野ですし、先ほどからお話に出ている生活者のライフスタイルに対するサービスこそ中小企業が機動的にやるところです。

これまでも日本経済は中小企業の厚みが支えてきましたが、それとはちょっと違う形で、機動力があって、ニーズをすぐつかんで入っていって、すぐ退出するという、新しいスモールビジネスの時代が来ているんだろうと思います。

そこに対して、例えばリスクをとるために、証券市場でお金が十分に調達できるだろうかとか、あるいはエンジェルといわれる、アドバイザーがいるだろうかというような点に問題が行き着くんだろうと思うんですね。そちらのほうも、ここ数年格段に進んできているようにも思います。

小宮山　新しいものをやろうとすると、二ついるんですね。「何かやりたい人」と「やる種を持っている人」。この人達をどうやって出会わせるかが課題でしょう。しかしやりたい人も種を持っている人もお金を持っていない。そうするとここにお金を出す人が必要。こういう仕組みを日本の中でつくれば、種を持っている人が勇気を持っている人に種をあげて、勇気がある人がどこかから出資金をもらって、新しい中小企業を起こしていく。そういうことを日本人がだんだん思い出している、その状況に今あるんじゃないかと僕は期待しているんです。

宮崎　現在ある法や規制などを意識しなくてもできる部分が、十分にあるんだと。

小宮山　規制に関しては難しいですよ。規制が非常に少なくなってきているというのは事実ですが、現場の人達に聞くと、まだあると言う。どういうことかというと、やはり認可の数が多くて、時間がかかるというのが実情なのです。そうすると逆に、自治体ですぐに認可を出すような市長がいたりすると、すぐにできてしまったりするわけですよね。その辺でもう少しうまく情報が伝わって、動き出そうという人達が増えてくれば、一気に起業が進むときが来るだろうと私は思っていて、そういう意味で楽観している面もあるんです。

島田　アイデアや技術を持っている人は、今日ご列席の皆さまの中にもたくさんいらっしゃると思います。そこで一番の問題は、先生方がおっしゃっているように、いいアイデアや技術があっても世の中が知らないということです。例えば、筋肉の量を量るユニークな技術をつくった人がいらっしゃいます。この技術を病院とかゴルフ場に持っていったらすごい効果があるはずなんですが、誰も知らないんです。

最近は、アイデアとお金はつくんです。しかし、広めてくれる人、アドバイスしてくれる人がないんですね。だから、大学などはアイデアの宝庫なのに、なかなか世の中に繋がっていない。ベンチャーキャピタルというのは、本来お金と知恵と力を出すという役割なんですが、これは、産業界にもう少し頑張っていただかないといけませんね。